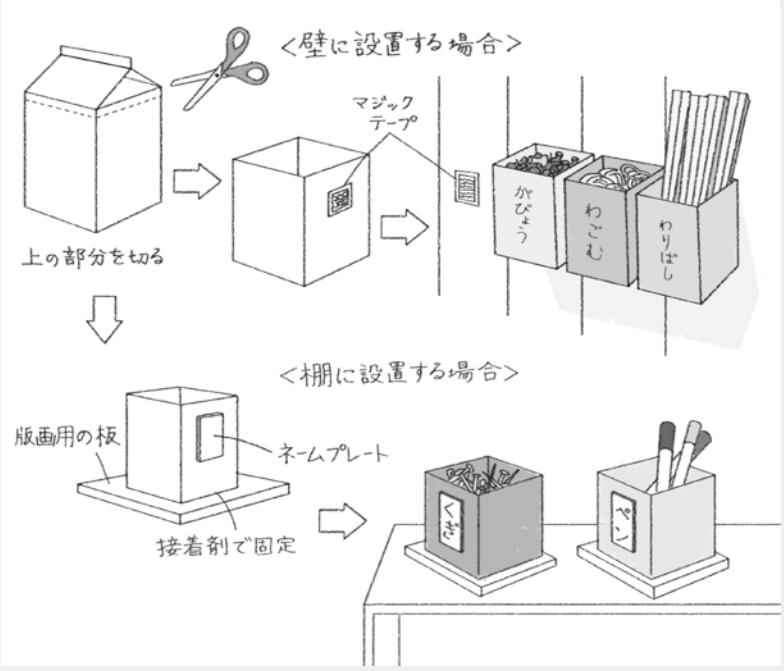
# ナカヤマヒロシのてだてだ 6

## いつでも使える環境づくり ～牛乳パックの素材入れ～




### 用意するもの

・牛乳パック
・ハサミ　・折り紙
・包装紙　・版画用の板
・マジックテープ
・接着剤

### 手　順

①牛乳パックの上の部分を切る。
②牛乳パックの中を水で洗い，乾燥させる。
③折り紙や包装紙などで牛乳パックをおおう。
④表に素材名を書く。
⑤<壁に設置する場合>
マジックテープを利用して壁に貼る。
<棚に置く場合>
接着剤で牛乳パックと版画用の板をくっつけて固定する。

### ポイント

生活科は，活動中心の学習です。そのため，子どもが「こういうものつくりたい」と考えた時に，それをかなえることができる環境をつくっておくことが大切です。

①一つの入れ物には，１種類の素材や用具を入れ，自由に使えるよう教室に常設する。
②子どもの要求に応じて，入れ物や素材を増やしていく。

【牛乳パックに入れる素材・用具の例】
割りばし・竹ひご・画びょう・ホッチキス・ものさし・くぎ・輪ゴム・焼き鳥のくし・クリップ・サインペン・マジックペン　など

**中山洋司**
**（なかやま ひろし）**

平和学園 学園長
40年以上のキャリアの中で，幼，小，中，高，大学及び国・公・私立学校すべての校種を経験。編著に「日本の未来はこれで変わる!」（日本文教出版）など。2007年より現職。

研究と実践①　生活

# 高洲の自然を食べよう・春夏秋冬

～２年生 季節の変化を楽しみながら暮らしを豊かに工夫できる学習～

山嵜　早苗（有明教育芸術短期大学　非常勤講師）
※実践校：千葉市立高洲第二小学校

## 1. はじめに

２年生では，畑でいろいろな野菜を栽培する。一生懸命草取りや世話をして，生長する様子を観察しながら育て，やがて収穫した野菜を料理して食べることは，大きな喜びにつながる。

栽培したものだけでなく，自然に実っているものを採取し，食べられるように工夫する経験は，自然との知恵比べとも言える活動である。自然の恵みに感謝するとともに，採取したものをおいしく食べられるように加工・保存などの工夫をしてきた先人の知恵を学び，引き継ぎ，改良して自分たちの生活に生かしていくことは，暮らしを豊かにする大切な営みとなるのではないだろうか。

ばばばあちゃん（協力してもらっている地域のお年寄りの愛称）と自然料理を始めるよ

## 2. 単元の目標

○季節ごとの「食べられる自然さがし」に関心をもち，季節によって変化する自然物の特徴や食べ方の工夫など，自然と人間の暮らしについてのかかわりに気付くことができる。
○自分の住む地域で，季節ごとに自然物の中から食べられるものを見つけることができる。
○簡単な調理をして食べることにより，諸感覚を通して季節を味わう体験ができる。
○身を守るための植物の知恵や，食べにくい自然物を工夫して食べる人間の知恵などに触れ，自然と人間の暮らしのかかわりに興味をもつことができる。
○“季節の味交流会”を開き，学んだことを積極的に発信していくことができる。

味交流会で出された料理（左　どんぐり団子　右　花梨のど飴）



## 3. 単元の構想

### （1）評価規準

| 関心・意欲・態度（規範意識） | 思考・判断 | 気付き |
|---|---|---|
| ・進んで野外に出かけ，季節ごとの自然を楽しもうとしている。<br>・身近な自然を観察したり，自然物を使って料理をつくったりすることに夢中になって取り組もうとしている。 | ・四季の変化や季節に応じて，自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりすることができる。<br>・簡単な料理の手順を覚えたり，工夫して料理したりすることができる。<br>・自然と暮らしとの関係を考えることができる。 | ・自分の住む地域に，季節によって様々な自然の変化があることに気付く。<br>・季節によって，地域の人々が自然の恵みを工夫して食べていることに気付く。<br>・自然物の身を守る知恵や人間の知恵，次の季節を考えた準備など暮らしの工夫に気付く。 |

### （2）単元構想（全32時間）

**春**　草が食べられるって本当？　（８時間）

**目標**　春の草花遊びから「食べられる草」さがしをすることができる。

**活動**
○よもぎをだんごにしたり，フキを煮て食べたりする簡単な料理のレシピを知り，料理をつくってみる。
○「春の味交流会」を開き，気付きを発表し合う。

**他教科関連**　・春ののはらうたづくりと発表会（国語）

バッタのせかい　“バッタとぶ”

ぼくはバッタ
たんけんはたのしいけれど
きけんもいっぱい
人間やかまきりなどにころされる
だから一日一日を生きていくのが
たいへんだ
だからぼくたちバッタは
毎日毎日をいのちがけで生きているんだ

**夏**　鳥が食べてる　いろんな木の実発見！　（４時間）

**目標**　食べられる木の実さがしをすることができる。

**活動**
○梅・桑の実・なつめ・びわ・やまもも・あんずなどの食べられそうな木の実を見つける。
○ジュースやジャム・ゼリーなど，木の実を使った簡単料理のレシピを調べ，つくってみる。

**秋**　おいしいものがいっぱいだけど　食べにくい実もあるよ　（14 時間）

**目標**　町たんけんに出かけ，「実りの秋」さがしをすることができる。

**活動**
○いも掘りをして，つるをフキと同じように煮て食べてみる。
○いろいろな木の実集めをして食べ方を工夫する。
○花梨の実からのど飴をつくったり，どんぐりをだんごにしたりする。
○臭い銀杏の実や，渋い柿の食べ方を地域の人に聞いたり調べたりする。
○「こまった木の実の大へんしん!－秋の木の実交流会－」を開き，工夫した経験を伝え合う。

**他教科関連**　・硬いクルミやどんぐりの実をトンカチで割ってみる。（図工）
・秋ののはらうたづくりと発表会（国語）

**冬**　冬の暮らしにそなえて準備していたんだ！　（６時間）

**目標**　冬の食べられる自然さがしをすることができる。

**活動**
○ゆずやきんかん，夏みかんなどの実を見つけ，マーマレードにする。
○干し柿や干しダイコン，つけものなど，いろいろな保存食をつくって冬の暮らしにそなえていることを知る。
○どの季節でも自然の実りを利用して暮らしていることを知る。

# 4. 実践の概要

【本実践の特色】

自然の少ない学校でも「のはらたんけんたい」になって，季節ごとの自然さがしをすると，いろいろな発見がある。生活科を中心にしながら，四季を通して他教科との関連的な学習で以下のような自然との触れ合いを様々に体験することができた。

・ものさしを使った，たんぽぽの茎の長さ比べ
・いものつるや木の実を使ったリースづくりや造形遊び
・ジャムやだんごなどの料理づくり

夏みかんジャム

からいりした銀杏の実

**① 自然を食べることと季節の暮らしの関連**

子どもたちにとって，ほろ苦い春の草料理も，あたたかい季節を迎えた喜びと関連していることがわかった。草摘みをしながら，春の喜びを感じることができた。

その後，よもぎだんごづくりを学習参観日に親子活動として行った。お店の草もちがよもぎを使っていることに気付いたり，季節の植物で桜餅や柏餅，月見だんごなどがつくられ，生活が楽しくなっていることを発見したりした。

そして，どんぐりやクルミの硬い実をトンカチで割りながら，たくさんの実を取り出し，春の経験を生かして秋のどんぐりだんごづくりに取り組むことができた。粘土遊びのようにこねて丸めるだんごづくりや，皮をむいてポキポキ折って砂糖としょう油で煮るフキやいものつる煮などは，回を重ねるごとに子どもたちが自信をもって取り組めるようになってきた活動の一つである。

**② 地域のお年寄りや保護者と一緒に学ぶ**

野菜づくりや自然の実りを利用してつくる料理には，生活経験豊かな地域のお年寄り（ばばばあちゃん）や学級の保護者サポーターに協力を求めた。

電子レンジで硬い花梨の実をやわらかくして料理しやすくする工夫や，夏みかんのあく抜きなどについては，協力者と一緒に研究した。中でも花梨のど飴の美しい色を見たことは，子どもたちにとって感動的な体験となった。各家庭にお土産として持ち帰ると参加できなかった保護者から「ごちそうさまカード」に「どんぐりだんごは，あんこより黒蜜が合う」「固まらなかった花梨のど飴は，お湯割りにして飲むのもいい」などの感想が寄せられ，こういった情報は次回への参考になった。

**③ 生活科で取り上げる簡単料理**

生活科では，できるだけ簡単な調理法を用いた。例えば，だんごに混ぜる水は，少しずつ入れ，「耳たぶくらいの固さになるまでこねる」など，勘に頼るようなところもあっていいと考えた。よもぎの量によってだんごの色に違いが出たり，水を入れ過ぎたため粉がべちょべちょになって固まらなかったりと，子どもたちは，失敗からもいろいろな発見をしていた。

**④ 繰り返すことによる上達**

一年間に何度も料理を繰り返すことにより，子どもたちは，確実に意欲的になり，料理がうまくなっていった。道具の準備や材料の扱い，洗いものや後片付けなどの手際もよくなっていった。友だちへの「よかったカード」にもその上達ぶりが書かれていた。

また，家族の誕生日に料理をつくったり，地域の料理教室に通う子が出てきたりするなど，料理への関心が高まってきた。

「どんぐりは，なかなかやわらかくならないよ」

# 5. おわりに

自然と人間の知恵比べは，興味が尽きない上，毎年発見がある。ゆえに「自然を食べる」経験は，３年生の総合入門期の学習づくりに発展させることができる。

生活科では簡単に学んだ料理を，総合の時間では，自分たちでつくりたい料理に挑戦してみたり，苦味や臭みの成分を調べてみたり，渋柿をおいしく食べる方法を考えたりと，様々な課題を設定して調べ学習をしていくことができるからである。

研究と実践②

# 食材の物々交換による交流学習が支援する食育

## ～とくしまみそ汁プロジェクトの試み～

藤本　勇二（阿波市立市場小学校 教諭）

## 1. はじめに

子どもたちの食にかかわる課題を受けて，食育の実践が全国で盛んに行われている。食育は，総合的な学習の時間を中心に実践されることが多い。しかし栽培や農作業体験を伴うために，農場や時間の確保，教師の不慣れや手つづきの煩雑さなどが壁となり，一部の学校や熱心な教師のみの実践になってしまっている実状がある。そこで，農作業や栽培の体験を伴わないで食生活を改善し，地域の産物への関心を高められ，かつ再現性においても優れている単元の開発が求められている。

本校は豊かな農村地域に位置し，農業生産性も高い。ただ，子どもたちの周りでは季節ごとに多くの野菜が栽培されているにもかかわらず，地域の農産物や農業に関する関心が高いとは言えない。さらに，子どもたちの食生活の改善や基本的な生活習慣の確立も課題である。朝ご飯を食べないことが多い子ども，食べても菓子パンだけの子どもも数名いる。野菜の好き嫌いも目立ち，給食の残滓（ざんし）の多さも課題である。こうした問題意識を踏まえて実践に取り組んだ。

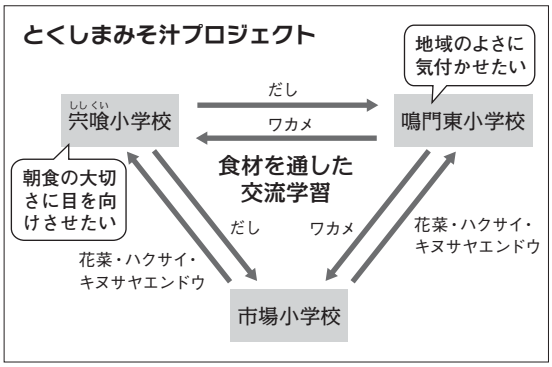
## 2. 「とくしまみそ汁プロジェクト」の実践

### （1）交流学習による学習支援

本校と，海辺の二つの学校の計３校で，みそ汁の「ワカメ」「だし」と，「旬」および「地場のもの」にこだわった野菜（キヌサヤエンドウ，白菜）や食材の感想・みそ汁をつくった記録などを交換する取り組みを行った。

交流によってそれぞれの学校の学習支援を行う。

阿波市立市場小学校の６年生 26 名が，一年間にわたって総合的な学習の時間（12 時間），家庭科（13 時間），国語（５時間）の計 30 時間をかけて取り組んだ。




### （2）仕込みと基本のみそ汁づくりから始める

５月に家庭科で「ごはんとみそ汁」の学習をし，自分の家のみそ汁にはどんな具が入っているのか調べてみた。結果，たくさんの種類の地域食材が使われていることを知った。１回目のみそ汁をつくった際に，子どもたちが野菜の「旬」をほとんど知らないことが浮かび上がった。そこで子どもたちは，よく食べる野菜の旬を農協の方に聞いたり，量販店で取材したりして調べた。また，栄養教諭から，野菜は路地ものとハウスもので，ビタミンCの量，栄養が違うということを説明してもらった。

**【プロジェクトの全容】**

| | |
|---|---|
| 総合12時間 | みそを仕込もう　2時間 |
| | 旬の野菜のよさを学ぼう　2時間 |
| | 交流しよう　2時間 |
| | 地域の食材をさがそう　2時間 |
| | 洋食で生かそう　4時間 |
| 家庭科13時間 | みそ汁をつくろう(1)　5時間 |
| | みそを比べよう　2時間 |
| | みそ汁をつくろう(2)　3時間 |
| | バランスのよいおかずをつくろう 3時間 |
| 国語５時間 | 手紙を書こう　2時間 |
| | レシピにまとめよう　2時間 |
| | レシピを送ろう　1時間 |

### （3）「み・そムリエ」になる

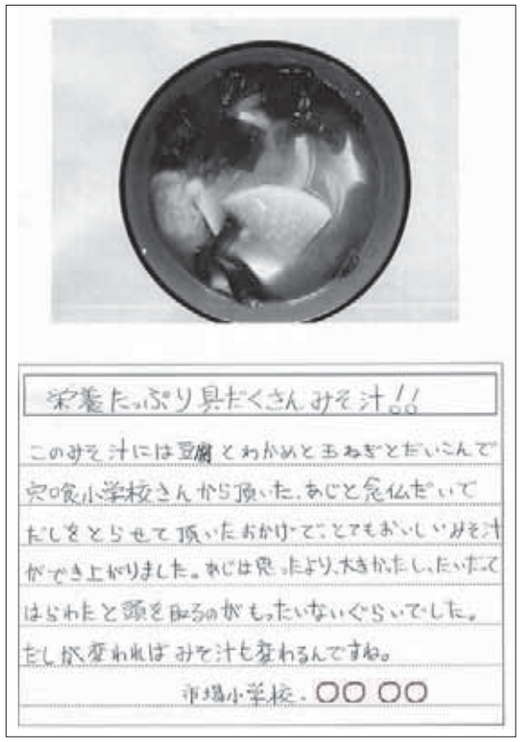
２学期初めの家庭科の時間に，１学期に仕込んだみその出来具合を確認し，試食した。この時，子どもたちは家で食べているみそと濃さが違うことに気が付いた。そこで自宅からみそを持ち寄り，食べ比べをした。子どもたちは，みそはどこでも同じ味だと思っていたことが間違いだと気付いた。その中で「全国のみそはもっと味が違うかな」という声があがり，次の時間は全国のみそを食べ比べてみることになった。各班でだしを取り，そこに，みそ（信州こうじみそ・仙台こしみそ・八丁みそなど）を溶かし込むという方法で比べた。子どもたちは日本全国に多様なみそがあることに驚き，みその奥深さを実感した。

### （4）食材の交換で交流の輪が広がる

「夏休みに，鳴門東小と宍喰小の先生と話をしました。二つの学校では総合でみそ汁をつくるそうです。そこからワカメとだしをもらえます」という話をした後，徳島県の地図を広げて両校の場所を確認した。「先生，海の近くだね」「みそ汁の材料をもらってばかりじゃなくて，代わりに市場小からも何か送りたい」そんな意見も出てきた。

「物々交換したいね」という子どもの願いから，交流学習が始まった。鳴門東小から米飯給食の日にサツマイモのみそ汁をつくること，宍喰小からは念仏鯛やあじ，いわしでだしをつくることが紹介されると，活動は一気に盛り上がった。栄養面では，無機質が二つの小学校から届くワカメと煮干しでまかなえる。後はビタミン類をとるために地域の野菜を入れることを考え，11 月が旬の地域食材，ダイコン，サツマイモ，タマネギ，ネギなどを入れてみそ汁をつくった。両校には，自分たちのつくったみそ汁の写真に言葉を添えてお礼の手紙を書いた。

２校から食材が届く



栄養たっぷり具だくさんみそ汁!!

このみそ汁には豆腐とわかめと玉ねぎとだいこんで宍喰小学校さんから頂いた。あじと念仏だいでだしをとらせて頂いたおかげでとてもおいしいみそ汁ができ上がりました。あじは思ったより大きかったしたいたてはらわたと頭を取るのがもったいないぐらいでした。だしが変われば みそ汁も変わるんですね。

市場小学校　○○ ○○

お礼の手紙



### （5）みそ汁の具から地域の食材への関心が広がる

子どもたちは，自分たちの地域の食材を２校に送りたいと考えた。それぞれの学校に送る食材の条件として，鳴門東小へは「みそ汁の具となる食材」，宍喰小へは「朝食に添えられる食材」があげられた。

子どもたちは取材を通して，地域の食材が少しずつ見つかり始めた。さらに市場町はかつて，キヌサヤエンドウの代表的な産地だったこともわかった。冬休みには，地域の旬の食材を使った「みそ汁」か「朝食のおかず」をつくることを宿題に出した。その中から「キヌサヤエンドウの卵とじ」をもとに市場町の旬の白菜を加えたオリジナルレシピが作成された。

**オリジナルレシピ　おすすめのポイント**

○白い白菜，緑のキヌサヤエンドウ，黄色の卵と色どりが大変きれい。

○野菜が嫌いな人でも食べやすく，栄養のバランスもよい。

○キヌサヤエンドウと白菜は「主に体の調子を整える食品」，卵は「体をつくるもとになる食品」，さらにご飯は「エネルギーのもとになる食品」なので，朝食にぴったり。

こうして地域の旬の食材であるキヌサヤエンドウと菜の花，白菜の三つにレシピとおすすめメッセージを添えて両校に送った。

## 3. 成果と課題

### （1）食材の物々交換による交流が学習を支援

他校と協同することで，それぞれの学校での目標を実現し，また食材の交流によって学習を大いに支援し合い，広げることができた。以下は学習を振り返っての子どもたちの感想である。

「朝ご飯をしっかり食べるようになったし，料理に入れる野菜の旬を考えるようになった」

「ダイコンが嫌いだったけど，みそ汁に入れると食べられるようになってきた」

「みそやみそ汁は万能。何にでも合っていろんな味を味わうことができる文化」

「鳴門東小と宍喰小との交流では，その地域特有のものがわかってよかった」

「鳴門東小と宍喰小との交流では，その地域特有のものがわかってよかった」

「市場の食材は，すだちくらいしか知らなかったけど，今ではたくさん言えます」

「おいしいダイコンやキャベツをつくっている祖父は自慢の存在」

感想を整理すると，「栄養バランスと朝食の大切さを知る」「地域の食材や旬のよさを知る」「自分の食生活の変化」「食文化への理解」「地域への関心」の五つの成果が明らかになった。また，食材を通した交流学習が，望ましい食生活習慣の形成や，地域への関心を高めることに効果があることの確認ができた。

### （2）交流学習を成立させる教材

みそ汁には，誰もが話題にできる共通体験があり，季節の野菜を入れることで地域の食材への関心も高まる。その上，地域ごとに違いがある。みそ汁のように共通性と地域性という特長をもつ料理を取り上げることによって，交流学習は食育を支援できるということが確認できた。

### （3）交流学習を支援する手立て

食材を３校で交換しながら交流学習を進める協同の様式は，再現性においても優れている。この様式を可能にした要因は，ネットワークを生かした学校間協同での単元開発，Ｅメールを生かしての子どもの交流学習，栄養教諭・ＪＡ・保護者などの協力による協同作業などの手立てである。一方で，３校をコーディネートすることの難しさも課題として残った。ＧＴの活用を含めた指導計画のあり方によって，交流学習の成果にも違いが出てくると思われる。今後も，教材性と指導計画を検討しながら交流学習を進める協同の様式を授業実践で検証していきたい。

特色ある実践を求めて

# 生活・総合を楽しむ味わいの旅 その7

村川　雅弘
MASAHIRO MURAKAWA
鳴門教育大学大学院 教授。
専門は教育工学，カリキュラム開発，生活科・総合的な学習。日本教育工学会評議員，中教審専門部会委員などを歴任。

## 教師や学校の「よさ」の「見える化」をめざして

研究者をめざしたきっかけは素晴らしい授業，授業者との出会いである。大学（学部2年）の時に，ビデオで金沢市の6年生理科の授業を見た。子どもが司会をし板書をし，各グループの実験結果を踏まえながら協議し，法則や原理を見出していくものだった。教師は時折出てきて軌道修正を行うというかかわり方だった。ビデオ視聴後，彼らは5年生の時に生徒指導上の問題を抱えていた子どもたちだったと聞いてさらに驚かされた。その時まで別の方向に進むことを考えていたわたしは，その日より「教師は授業で勝負する!」をモットーに研究室（水越敏行研究室）を決定し，その後研究者の道に入っていった。

教育事象は複雑で一般化や伝達が難しく，積み上げがなされにくい。そこへいくと工学の世界は違う。例えば，わたしが子どもの頃に憧れていた「スーパージェッター」（30 世紀の未来から来た少年が活躍する SF アニメ。「ドラえもん」ではないところで年代がわかる）が持っていたものが二つある。マッハ 15 で走行する「流星号」とどこからでも話ができる通信機である。同じような通信機なら実用化され，10 年以上前からわたしも持っている。工学の世界は日進月歩である。一方，教育はどうだろうか？

わたしの専門分野の中でメインは教育工学である。素晴らしい教師や効果をあげている授業，うまく改革・改善が機能している学校の「よさ」の「見える化」を図り，手立てとして一般化し，伝達可能性や効率化を高めていく。そのための類型化やモデル化，システム化に取り組んできた。

## 学習のわざを身に付けた子どもたち

いま最も「手立てが見える」のが東村山市立大岱（おんた）小（西留安雄校長）である。09 年1月より懇意にしている。それから1年あまりで4回も訪問した。

初めての訪問，09 年1月7日は正月明けの授業初日であった。校内研程度のつもりで訪問したのだが，全学級の公開授業だった。どの学級も子どもが落ち着いており，ノートもしっかりととり，発表や協議が活発であった。学級担任の半数が教師歴3年以内の若手，研究主任は 28 歳で 25 歳から担当しているなど，驚くことばかりであった。さらに信じられないことに，大岱小は数年前までは学力面及び生徒指導面で困難校であった。

大岱小が大きな課題を克服してきた過程や方策を少しだけ紹介したい。その一つが時間確保のため職員会議や委員会をほぼ撤廃したことである。大岱小が最も大事にしているのは「教室で子どもたちと向き合う」ことである。そのため昼休みや放課後に教師が子どもと遊んだり学習のケアをしたりしている姿が目につく。また，授業研究は年間 40 回（教師一人につき2回）行っている。すべてワークショップである。授業研に手応えを感じているからつづくのである。

授業改善は学校をあげて行ってきた。学習のルールやルーチンなどの学習規律，「学習わざ」や「言語わざ」（詳細は，学校のホームページ http://higashimurayama.ed.jp/e03-onta/index.htm）を学校として体系化し，毎回の授業で教師も子どもも意識して実行している。昨秋からは，子どもたちで授業を進める方法をまとめた『大岱式まなブック』（学校ホームページよりダウンロードできる）を作成し，子どもたちに活用させている。

09 年 11 月に訪問した際には，2年生児童3名が校内研の授業において教師役を務め，（風邪のためにまったく声を出すことのできない）教師が作成した資料に基づきながらも，しっかりと自分たちの言葉で発問をし，協議を進めていた。この学級だけでなく，子どもたちの姿に「学習わざ」や「言語わざ」が定着していることが伺い知れた。

大岱小の改革のきっかけは上越市立大手町小の実践及び，そこでのわたしの講演だと聞いている。授業改善には「学習スキル」[1] の考え，研修改善には「ワークショップ」[2] の方法を導入し実践してきたら，学校がよくなってきたとのこと。手立ての「見える化」をめざしてきたわたしにはとても嬉しいことである。

## 必然性のある活動が力をはぐくむ

前号では，新型インフルエンザの影響でわたしが辛くも「空腹体験」を逃れることとなったいきさつを紹介した。（生活＆総合教室 57 号参照）突然の学年閉鎖で体験が延期となった5年生の子どもたちはその後どうしたのだろう。3月初旬，所々に雪が残る上越の大手町小 ( 加藤誠雄校長 ) を再び訪問した。

この空腹体験は 20 年以上もつづいている全国的にも有名な取り組みである。輸入がストップし，なおかつ上越が雪で4ヵ月閉ざされたとの想定の下で，自分たちが育てた米や野菜を 120 日で割り，さらに5年生児童数で割り，その食料で3食分をまかなおうとする体験である。結局は 09 年の 12 月3日と4日に実施された。新聞記事や記録写真から，空腹のあまりぐったりしている子どもたちの様子が見受けられる。しかし，この共通体験がその後の「食」に関する活動の基盤になっていくのである。

2月から子どもたちは校区にある本町商店街に米粉（こめこ）（うるち米ともち米を原料とした米の粉）の売り込みを展開している。食糧の国内自給率を上げる取り組みである。例えば，あるマーケットに置かれた子ども作成のレシピはボロボロになるまで読まれている。1度目の結果を受けて，2度目の売り込みを行うかどうかを学年で話し合う。「子どもが頑張っても効果がない」「大人がしないから子どもがする」「子どもがするから効果がある」など，様々な意見が出た。

6年生は3年生の時に，本町商店街を舞台に総合的な学習を行ったが，改めて商店街の活性化のために立ち上がった。国内の他地域の取り組みを調査し，その中から様々なアイデアを考え実行してきた。パン屋と肉屋の協力を得ての「コロッケパン」の開発や，雁木（がんぎ）（町家の軒先からひさしを長く張り出し，その下を通路として，積雪中でも人々が通行できるようにしたもの）をイメージした「ゆるキャラ」づくりなどである。「ゆるキャラ」をもとに作成した旗はまもなく商店街の雁木にはためくことになる。

大手町小は，創造的探究心，コミュニケーション力，情報活用能力，内省的思考力，共生的な態度の五つの資質・能力の育成をめざしてカリキュラム開発を行ってきた。教科でも総合的な学習でも行事でも，子どもたち一人ひとりが，取り組む課題に必然性を感じ，その追究・解決活動の中でこれらの資質・能力を主体的に活用する場面をいかに教師が設定し，適切な手立てを打っていくかが重要である。豊かな体験を通して感じたこと，思ったことを自分の言葉で言語化し，それらを関連付け意味付けることで，確かな力をはぐくんでいくものだと，子どもの姿を通して再認識させてもらった。

**[参考文献]**

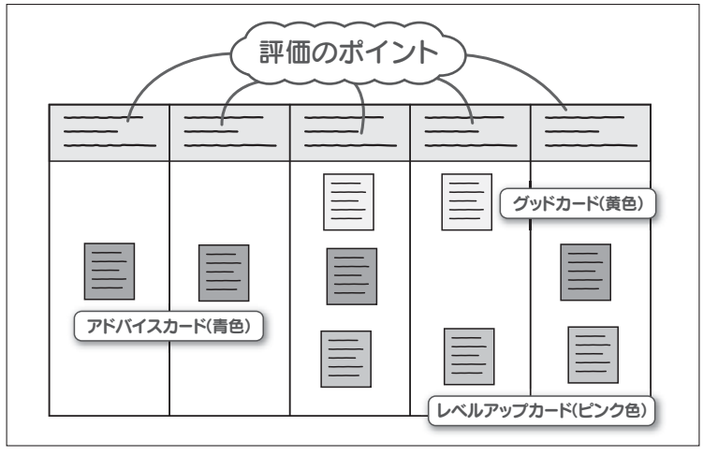
1）村川雅弘編『「確かな学力」としての学びのスキル』日本文教出版　2004 年

2）村川雅弘編『ワークショップ型研修のすすめ』ぎょうせい　2005 年

思考力・判断力・表現力・そして協同性を育む

# わいわい わくわく ワークショップ

## アドバイスをし合って説明名人をめざす，相互評価ワークショップ




このワークシートは，発表や説明の練習をする時に活用する。グループに分かれ友だちの発表・説明を聞き合い，相互評価をすることで子どもたちが自らの課題に気付くことができる。

シート上段に設けられたいくつかの「評価のポイント」の欄の下に，説明を聞いた子どもが「上手にできていたこと」をグッドカード（黄色）に，「直したらよいこと」をアドバイスカード（青色）に書いて貼る。説明した子どもは，それらのカードをもとに自分の課題を見つけ，レベルアップカード（ピンク色）を書いて貼る。

### ワークシート活用のポイント

**【評価のポイントをはっきり提示】**

評価のポイントをカードに書き，黒板に提示し，どの子にも意識させる。また，よくわかる説明ができている児童を代表で発表させ，全体の意欲を高める。

**【手順表とタイマーで学習の見通しを】**

見通しをもって活動できるように，手順表を作成し掲示しておく。

また，グループごとにタイマーを持たせ，カードを書く時間を２分に設定することにより，ポイントを絞って手早く書かせることができる。

**グループはっぴょう会**

はっぴょう1 おばけたいじ
グッドカード アドバイスカード を書こう。(2分間)
カードを読んでから，ワークシートにはってあげよう

はっぴょう2 ペンギンロケット
グッドカード アドバイスカード を書こう。(2分間)
カードを読んでから，ワークシートにはってあげよう

はっぴょう3 しんぶんでっぽう
グッドカード アドバイスカード を書こう。(2分間)
カードを読んでから，ワークシートにはってあげよう

はっぴょうが終わったら，
レベルアップカードを書こう。

## 具体的な実践例

２年生の国語の単元「おもちゃのつくり方を教えるお店をひらこう」で，生活科の単元「１年生を招待しておもちゃまつりをしよう」と関連を図りながら取り組んだ。“１年生におもちゃのつくり方を説明したい”という目的意識・相手意識をもって取り組ませることでわかりやすく説明する力が育つと考えたからである。そこで，相互評価ワークショップを行い説明のスキルの向上を図った。

うまく説明できるかな？

**手順① 友だちの説明を聞き，カードを書き，ポイントごとに貼る**

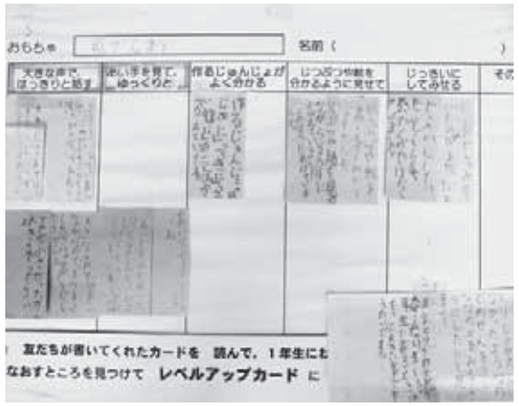
子どもの活躍の場を多くするため，ペアで一つのおもちゃのつくり方を説明させた。ワークショップは１グループ３ペア（計６人）で行った。

各ペアが順番に説明を行い，説明を聞いた子どもたちは，思ったことをグッドカードやアドバイスカードに書き，「評価のポイント」の項目ごとに貼った。

ふせん紙１枚につき一つのポイントについて短く書かせたことで，書くことが苦手な子どもでも抵抗なく書くことができた。

**手順② 友だちからもらったカードをもとに，次のめあてを書く**

発表を終えた子どもは友だちのカードを読み，自分の説明のしかたのいいところや課題に気付き，よりよくするための課題をもつことができた。その課題をレベルアップカードに書きワークシートに貼った。




**【児童のレベルアップカードより】**

・1年生に教えてあげる時は，もっと大きい声で言いたいです。
・下を向いていたので，前を見て言うようにします。
・少し早く言うので，1年生の前ではゆっくり言いたいです。

### シートを活用するとこんな効果が…

1　子ども一人ひとりが目的意識をはっきりもち，意欲的に学習を進めていくことができる。

2　カードを書くために，友だちの説明を一生懸命見たり，聞いたりすることができる。

3　評価のポイントが明確なので，相互評価がしっかりできる。

4　評価のポイントが複数に分けられており，そこに色別のカードを貼ることで，どの子も自分の具体的な課題に気付くことができる。

5　「書く力」と「聞く力」を付けることができる。

| | |
|---|---|
| 学　年 | 第２学年 |
| 科　目 | 国　語 |
| 題材名 | 「おもちゃのつくり方を教えるお店をひらこう」 |
| 学　校 | 香川県坂出市立林田小学校 |
| 実践者 | 佐野珠代教諭（現琴平町立琴平小学校） |

研修新時代

# こんな時どうするの？

竹内 亮（福山市立新市小学校）

## 言語力・表現力育成の指導はどうすればいいか？

子どもたちの様子を見ると，自分の思いをうまく伝えたり，人前で表現したりする力が育っていない。学校全体として，どのように指導していったらよいのでしょうか？

まず，本研修に先立ち，言語力や表現力が高い学校を訪問し，生活科と総合的な学習における子どもたちの発表の様子を参観し，ビデオ録画した。その記録を持ち返り視聴し，本校の子どもたちの日頃の様子も踏まえながら，教育活動全体を通して「育てたい力」を整理した。その結果，低・中・高学年別に「課題設定力」「コミュニケーション力」「人とかかわる力」「自己評価力」「達成感」などがあがってきた。本研修では，中学年の「子どもの実態と育てたい力」の一覧表をもとにワークショップを行うことにした。

### ◆具体的な手立てを引き出し，整理・共有化する

参加した16名の教師を4名ずつ,「国語」「生活科・総合・表現」「国語・生活科以外の教科全般」「特活・行事」の教科・領域別チームに分けた。なお，どのチームにも低・中・高学年の担任の教師が一人は入るようにした。各教科・領域における具体的な学習場面で，学校として共通におさえるべきポイントやとるべき手立てを，これまでの経験や知識から各自が引き出した。それをふせんに書き，グループで整理し，最後に全体で共有化を図った。

「生活科・総合・表現」チームの様子

写真（「生活科・総合・表現」チーム）のように，模造紙の真ん中に「子どもの実態と育てたい力」の一覧表を貼り付け，その周りに各自が書いたふせんを貼り，構造化を図っていった。本研修の内容及び時間配分は次の通りである。

1 本研修のワークショップの進め方の説明（5分）
2 個人によるふせんの書き出し（12分）
3 グループによるふせんの整理（28分）
4 発表（12分：3分×4チーム）
5 本研修の成果の生かし方の確認（10分）

### ◆各教科・領域を越えて共通の手立てが見える

参加者の半数は若手教師であったが，数多くのアイデアが出てきた。また，中堅・ベテラン教師も経験によって培われた手立てを出した。作業の最終段階に入ると全員で手分けしてまとめる姿が微笑ましく感じられた。改めてワークショップの効果を実感した。

各チームから以下のような提案がなされた。共通なものも散見された。

- **「国語」チーム**　「正しい言葉づかいの指導の徹底」「ことばタイムの工夫・計画」「話す・書く・読むなどの言語活用の場の計画的な設定」
- **「生活科・総合・表現」チーム**　「目的意識」「多様な人からの評価」「取材や交流の際の礼儀やマナーの育成」
- **「教科全般」チーム**　「協力して取り組む活動の設定」「順序立てて話す活動（例：体育のルールの説明）の充実」「（本校で開発した）発表名人の意識的活用」
- **「特活・行事」チーム**　「一人ひとりがめあてをもった行事参加」「縦割り班・異学年交流の充実」

最後に，本研修の成果を生かすために，教科・領域で共通なものの整理，アイデアの「仕分け」や具体的な手立て化（学習の手引きや掲示物の作成など）を手分けして行っていくことを確認し合った。



# 生活・総合への提言

## ～イメージマップで活動の想定～

小山　紳一
平塚市立松原小学校
校長

### 1　生活科の現状から…

今，小学校の教師はとにかく時間がない。日々の教材研究を行うのが重要だとわかっていながらも，なかなか時間がとれないという現実がある。特に生活科においては，定番の活動を行わせておけば何とかなると思っている教師が多いのではないだろうか。そのような現状もあり「活動あって学びなし」ということが言われてしまうのである。

しかしながら，やはり，生活科は事前準備や教材研究が必要な教科である。

生活科は，子ども一人ひとりが目的（ねらい）をもって自分なりの学びを深めていく教科である。当然のことながら子どもたちの思いや願い，活動はそれぞれ異なる。教師は子どもからどんな発想や願いが出てきても，それに対応できるようにしなければならない。また自然や環境は日々変化し，子どもたちを取り巻く人的環境も年々変わってきている。教師は環境設定についても十分な事前調査・研究をしておく必要がある。

花や野菜の栽培方法，小動物の飼育方法など，基本的なことが変わらない領域もあるが，やはり授業をするためには教材研究が必要である。生活科は過去に蓄積された教材研究が生かされる分野でもあり，学校に蓄積された資料を掘り起こし，生かすことでも十分な成果を得ることができる。

一つの例として，教師自らがイメージを広げたり深めたりしながら事前に授業の想定をしておくためには，「イメージマップ」が有効である。本稿では，1年生の秋の活動を題材に，イメージマップの具体的な活用の方法を紹介することで，“想定”の重要性について論じてみる。

## 2　各段階におけるイメージマップの活用例

**イメージマップとは・・・**
自分の頭の中にある考えや情報などをすべて表出させるための手法。紙の中心にテーマとなることを書き，二重丸で囲む。そこから派生して考えたことや情報を一つ書いては丸で囲み，線で結んでいく。一つの囲みには一つのことを書く。最終的に頭の中が空になるまで書くことがポイント。

**（1）子どもたちの思いの想定**

「秋」を題材としたこの単元で，子どもたちはどのような思いや願いをもつだろうか。教師はまず子どもの視点にたって，子どもたちの思いや願いを想定してみる必要がある。この時，注意すべきは「秋」という題材だからといって木の実や葉っぱなどの自然分野に限定せず，地域の生活の変化，人とのかかわりなど大きな視野をもって子どもの身の回りから活動の想定をすることである。

落ち葉をたくさん集めたいな

子どもたちにとっての秋というイメージを探りながら，秋のイメージを広げたり深めたりしていく。学習の前に，ワークショップ形式で教師どうしが意見交換をしながらイメージマップ作成を行うと，さらに効果的である。

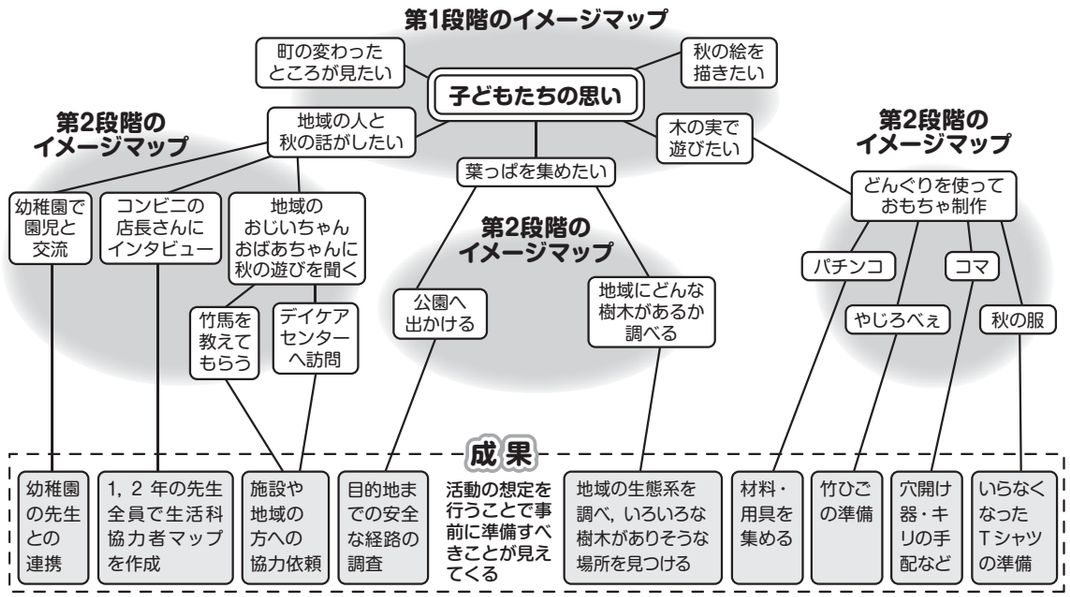
**（2）実現できる活動とその活動が発展するための想定**

子どもたちがやってみたい活動の想定ができたら，次はそれが実現可能なものかを検証していく必要がある。季節・地域などの諸条件により実現可能な活動は必然的に決まってくる。加えて重要なことは，その活動がどのように発展していくかを想定することである。

実際に活動に入ったら，子どもたちが主体的に活動に浸っていく姿を実現できることが望ましい。

（1），（2）で述べた想定によるイメージマップを以下に示す。

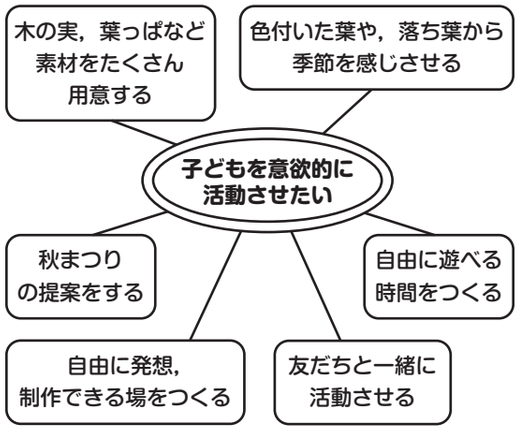
木の実を使っての「秋の服」づくり　完成した「秋の服」



子どもたちの思いと活動の発展を想定したイメージマップ

**（3）意欲的に活動させるための想定**

次に教師は意欲的な活動となるための要素について想定し，そのための準備をしておく必要がある。



活動意欲を持続させるためのイメージマップ

ポイントは，授業の中で，どんな声かけやはたらきかけをすればねらいに沿った活動になるか想定することである。ここまで想定できれば，あとは事前準備として手立てを考えることができる。以下，手立ての例をいくつか紹介する。

**想定から見えてくる手立て 1**

**〔おしらせじまんタイム〕**
授業の中で個人や小集団で自分たちの作品や活動計画などの特長をみんなにお知らせする時間を設定する。本人たちは表現したいという欲求を満たすことができ，聞く側は制作や次の活動のヒントにもなる。

**想定から見えてくる手立て 2**

**〔おしえてコーナー〕**
朝や帰りの会でみんなに質問できる場面を設定する。また掲示板に特設コーナーをつくり，自分では分からないことをカードに書いて貼り，みんなから解決案をもらう。

**想定から見えてくる手立て 3**

**〔お便りカード〕**
活動した記録を手紙に書いて保護者へ渡し，返事をもらう。家庭にとっては学校や子どもの様子がわかる上，共通の話題として家庭で子どもとのかかわりがもて，学校の活動への理解と協力が図れる。

## 3　おわりに

子どもの考えや動きをあらかじめ想定して，環境設定をしたり手立てを考えたりしておくことは，生活科に限らず，すべての学習活動を組み立てていく上で非常に大切である。子どもまかせで行き当たりばったりでは，子どもの気付きに教師が気付かないという事態も出てきてしまう。活動前にできるだけ様々な場合を想定しておくことで，より子どもの理解が進み，次への指導やアプローチができる。学校に蓄積されている過去の実践報告や教材研究の資料は，子どもの考えや行動を想定する上で大変有効な資料となる。これらの資料を掘り起こしつつ，まずは教師自身が一人ひとりの子どもを思い浮かべながら，発想を広げていくということを常に心がけておくことが大切である。

イメージマップを活用して楽しい秋まつり

# 私の学校の特色

## ①福岡県春日市立日の出小学校

**―花いっぱいになあれ!―**

教諭　髙橋　明子

### コミュニティ・スクール日の出小

本校は平成17年度よりコミュニティ・スクールとして，学校，家庭，地域が連携を図り，地域とともに学ぶ開かれた学校づくりを行っている。そのため，子どもたちは，様々な場面で保護者や地域の人と触れ合いを重ねてきている。

### 「MY TOWN 日の出大作せん!」

社会科で校区の特徴を学習した3年生の子どもたちは，総合「MY TOWN 日の出大作せん!」の学習で，これから自分たちの町をどんな町にしたいか話し合った。保護者に取材をしたり，自治会の人と話し合ったりした結果，“花いっぱい”の町づくりに取り組むことになった。

### 花いっぱい大作戦開始！

子どもたちは，自治会の人とプランターを置く場所を話し合い，花植えの計画をたてた。そして，保護者や地域の人とプランターに花を植え，子どもたちが考えた場所に花を運んだ。

子どもたちはプランターに「花いっぱいの町になりますように」「この花を見た人が笑顔になりますように」などの願いをこめた立て札をたてた。そして，花いっぱいの町となり，地域の人に喜んでもらえるように花の世話を始めた。

### 作戦の見直し

秋になり，子どもたちは保護者や地域の人へ今までの取り組みについてアンケート調査を行った。そして，このアンケートを活用して，今までの活動が地域の人に喜ばれ，町づくりに貢献できたかを振り返った。その結果「町が明るくなった」「3年生の花を見て元気をもらった」という成果もあったが，「水やりを忘れずにしてほしい」「もっとプランターを増やしてほしい」など課題も明らかになった。そこで，次は今までの経験やアンケート調査の結果をもとに「花の種類」「プランターの数」「プランターを置く場所」「世話のしかた」について地域の人と話し合い，秋の花植えの計画をたてた。

### 花いっぱいになあれ！

地域の人とたてた計画のもと，子どもたちは秋に再び花植えを行い，現在も花の世話をつづけている。子どもたちの植えた花は，冬の寒さに耐え，あたたかな春の訪れを待っている。春になると，色とりどりの花が町に咲き誇り，通る人の目と心を楽しませてくれることだろう。

## ②大阪府高槻市立郡家小学校

**―出会いを豊かな心に―**

校長　三木　正博

### 人とつながり合える

多様な体験や活動は総合的な学習を始めとして，人権教育での出会い，低学年の生活科等を通して培われる。そのために，地域・保護者の協力やつながりが大切となる。本校の特性や地域性を生かした取り組みとして，今城塚古墳，西国街道，歴史の旧跡等の存在から「歴史と文化」とし，学校を取り巻く福祉施設の環境から「福祉」とした。これらの実践の中核として位置付いているのは，次項より述べる「道徳教育」である。

### 生きる力の育成

未来を切り開く道徳教育において，「生きる力」の核となる豊かな人間性をはぐくむことこそが今日的な課題であると言える。人と人，人と自然，人と社会，人と文化など，人とのつながりを大切にし，生命のつながりへと発展させ，生命を感じる人生観が必要である。

そのためには，豊かな体験を生かした「道徳の時間」の充実が不可欠である。道徳教育の要である「道徳の時間」が，その特性を踏まえて実施され，すべての教師と子どもたちがあたたかなまなざしで真心を伝え合う時，心に響き合う時間となり，心の充実と子どもの「生きる力」が培われると考える。

### 学んでいるのは生き方

道徳教育の根本は，豊かに「生きる力」をもった「知・徳・体」の調和がとれた人間を育成することである。

「生命を大切にする心」「他人を思いやる心」「美しいものや自然に感動する心」などの豊かな人間性をはぐくみ，人間としての自己存在感と自己実現の感動を充実させる教育活動の創造が学校の責務となる。

# 栽培特集

# ペットボトルで イチゴづくり！④

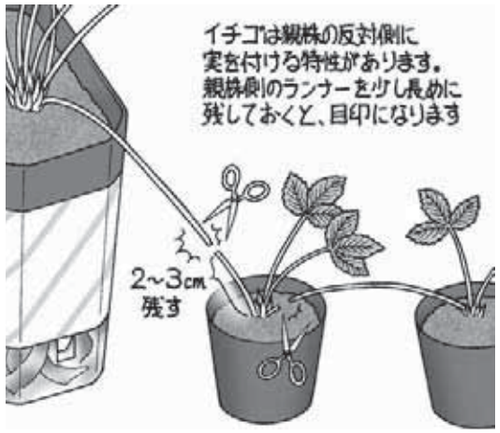
竹村久生（静岡県立浜松視覚特別支援学校 教諭）
（日本農業教育学会 会員）

前号までで，ペットボトル鉢のつくり方から収穫までを取り上げてきました。最終回となる今回は，栽培活動を一年間だけで終わらせるのではなく，翌年以降も継続して行うための方法を紹介します。

イチゴは株元からランナーという茎が伸びてきます。収穫時期までは早めに摘まなければいけませんが，収穫終了後にそのまま伸ばしていくと，次の年も栽培可能な子株を採取することができます。

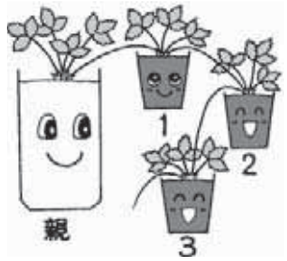
## 子株を採取しよう～苗の一人立ち～

**これが大事！** ポットに植えて 20 日以上たってから，親株から子株を切り離します。切り離した子株は，有機肥料を少なめにし，水やりを多くして日なたで育てます。切り離し後にまた別のランナーが出てくるので，早めに摘み取りましょう。

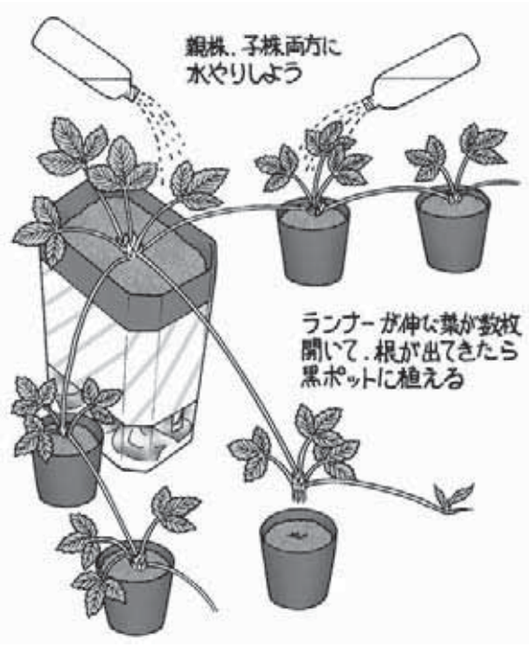



**ワンポイントアドバイス**

子株は２番目以降を使いましょう。ウィルス病になりにくく生育がよい苗になります。




## 子株の育成にチャレンジ




**ランナーとは…**

イチゴの株元から生えてくる茎の一部。枝状に地上を這うように伸びることから「ほふく茎」とも呼ばれる。節が付いており，そこから根を生じて，苗となる。

**ワンポイントアドバイス**

U字形の針金，クリップなどでランナーを押さえておくと発根しやすくなります。

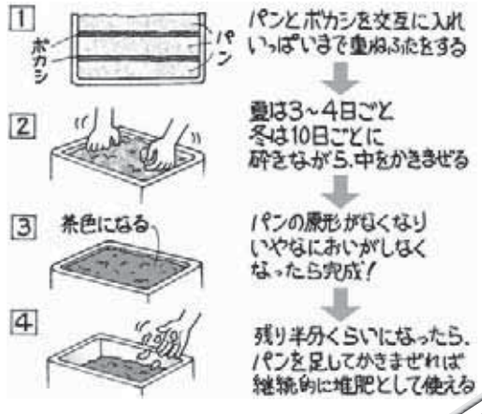
## オマケ：パンで堆肥をつくろう

給食の残りのパンなどを使って，簡単に堆肥がつくれます。園芸店などで売っているものと同じように使えてにおいもしないのでとっても便利！

**用意するもの**

①虫がわかないように必ずふた付きで密閉できるもの。
②米ぬかやもみがらに微生物菌を加えて発酵した有機質資材。園芸店などで１袋 500 円程で購入できる。
③給食の残りなど，どんなパンでもOK。

**つくり方**




4回シリーズ

# 万全の体制で先生をサポート

- 活動計画をつくりたい…
- 授業で使える教師用ツールってないだろうか…
- 子どもたちの興味をひく動画や写真を見せたい…
- 導入のきっかけとなるようなコンテンツがほしい…

## こんな時こそ日文の指導書!

## 充実のラインアップ

※上・下巻とも同じ構成です。

### 研究編

教科書編集の考え方，各単元のねらい，単元展開上のポイントなど，教科書を有効活用した授業へのヒントが満載。授業と教科書本編をつなぐ架け橋となる一冊です。

### 資料編

緊急時の救護のしかた，外での活動でよく見る危険な動植物など，活動を深め，広い知識を得ることができる資料集。授業をする上で役に立つたくさんの専門的な情報がつまっています。